

和歌の説得

— 『石上私淑言』 卷三第八一項考 —

田 畑 真 美

はじめに

前回の論文では、本居宣長の歌論『石上私淑言』と物語論『紫文要領』に即して、「物のあはれ論」は人間共有の「弱さ」を知り、それを受容することも含んでいることを考察した。¹⁾今回はそこでの議論を踏まえ、人間が自分の情を他者に伝えようとする際に、どのようにすれば十分伝わるのかという表現のあり方についての考察に踏み込む準備をすることが目的である。もう少し具体的に言えば、宣長は普通の言葉や漢詩などでは伝えきれないものを和歌で伝えることが出来ると考えている。そしてその和歌の持つ力は、「あはれの深さ」、すなわち他者をどれだけ感動させられるかということと直結するものであった。ここではそうした和歌の持つ力とはどういうものかを考察することとする。

手法としては、主に歌論書『石上私淑言』を取り上げる。なかでも一つの手がかりになる箇所として『石上私淑言』卷三第八一項「歌は詩よりもあはれ深き事」を中心にして、ここで展開する和歌と漢詩の相違についての宣長の見解を分析することで、上記の問題を解く一助としたい。

一、和歌の本意

(1) 「ただの詞」と和歌

まずはじめに、宣長の和歌理解について基本的なことを確認しておく。このことは漢詩との相違を考える上で重要だからである。そもそも和歌とは宣長によれば、「詞のほどよくとのひ、文ありてうたはるる物」(『石上私淑言』卷一 p.87)²⁾である。宣長は和歌の説明をする際に言葉が整っていること及び文があることを再三強調する。³⁾それは、和歌と「ただの詞」、日常生活で何の工夫もなしに使う言葉とを厳密に区別するためである。宣長は、両者の区別をそれが「あはれの深さ」を表現できるか否かで考えている。そしてそれは、「文」があるかないかによるのである。このことに関して宣長は次のように述べる。

ただの詞は其意をつぶつぶといひつづけて ことよりはこまかに聞こゆれ共 猶いふにい
はれぬ情のあはれは 歌ならではのべがたし。其いふにい はれぬあはれの深きところの
歌にのべあらはさるるはなにゆへぞといふに 詞にあやをなす故也。其あやによりて か
ぎりなきあはれもあらはるる也。さてその歌といふ物は ただの詞のやうに事の意をくは

しくつまびらかにいひのぶる物にはあらず。又其詞に深き義理のこもりたる物にもあらず。ただ心にあはれとおもふ事をふといひ出て うち聞えたる迄のことなれども 其の中にそこひもなくかぎりもなきあはれのふくむ事は 詞にあやあるゆへなり。(同 p.113)

日常で使用する「ただの詞」は、ものごとの意味内容を筋道をつけて詳しく叙述するし、その点では長けている。しかし限りなく深いあはれ=感動については言い表せない。このことは、詳しく細々と筋道あるようにものごとを説明するということと、感動を表現するということは別の作業であることを意味している。感動を表現するには別のツール、すなわち詞の文が必要なのである。というのは、詞の文の中にこそ、深い感動がこもり、表現されるからである。文がある詞を備えるもの、それが和歌にほかならなかった。

翻って考えれば、そもそも和歌とは「歌は物のあはれをしるよりいでくるものなり」(同 p.99)とあるように、「情」、すなわち「物のあはれを知る」ことから出てくるものであった。「歌よむは物のあはれに堪へぬ時のわざなり。」(同 p.108)ともあるように、ものごとに盛んに反応し揺れ動く「情」を持つ生きとし生けるもの-特に人間-が自分を取り巻く事象に触れて「情」を動かし、その感動の深さに堪えきれずに外に表出するのが和歌なのである。⁴⁾そしてその「物のあはれ」に堪えきれず表出した言葉は、自然と文のあるものとなるという。感動に堪えきれないときに、その感動は「をのづから」言葉として出てくる。「をのづからほころび出ることばは 必長く延て文あるもの也。これがやがて歌也」(同 p.109)とあるように、感動は声を長く引き、文があるといった和歌の形を必然的に用意するのである。

さらに重要なことは、次の2点である。まず第1点は「深きあはれはただの詞にいひては飽きたらず同じ一言も 長くあやをなしていへば 心はるる事こよなし」(同)というように、「ただの詞」では感動の主体がその感動を晴らしきることができないことである。宣長はこの点について次のようにも説明する。

今日にちかく有事を引ていはば 今人せちにもものかなしき事有て 堪がたからんに その悲しきすぢをつぶつぶといひつづけても 猶たへがたさのやむべくもあらず。又ひたふるに かなしかなしとただの詞にいひ出ても 猶かなしさの忍びがたくたへがたきときは おぼえずしらず 声をささげてあらかなしやなふなふと長くよばばりて むねにせまるかなしきをはらす。その時の詞は をのづからほどよく文ありて其声長くうたふに似たる事ある物也。これすなはち歌のかたち也。ただの詞とは必ず異なる物にして その自然の詞のあや 声の長きところに そこひなきあはれの深さはあらはるる也。かくのごとく物のあはれにたへぬところよりほころび出て をのづから文ある辞が 歌の根本にして真の歌也。(同 p.110)

悲しい出来事があって、その「すぢ」すなわちその悲しい出来事についてただ説明的にどう
 いう悲しいことがあってなぜ悲しいのか言語に表明し続けても、悲しさには堪えきれず、その
 感情を晴らしきることはできない。それは、ひたすら「かなしかなし」と悲しいという感情を
 ただ単純に「かなし」という詞で表現しているだけの場合も同様である。先にも確認したよう
 に、「ただの詞」では深い感動は表現できないし、また深い感動を表現すること、ものごと
 の筋をくどくどと事細かに説明することは区別すべき事態であった。つまり宣長は、例えば悲
 しい状況で悲しいという感情に心動かされる時、声長く引き、文あるかたちで表現しなければ
 その感情はその感情の主体のなかに滞り、晴らしきることができないというのである。換言
 すれば、和歌の形こそが、人の心の中に感情が閉塞し鬱屈してしまうのを防ぎ、人にこの上な
 き慰めを与えうるのである。和歌はいわば、読み手の心を落ち着かせ、安寧、もしくは晴れ晴
 れとした解放へと導くものであった。

以上、第1点は、和歌が詠み手に与えうる状態に関することであった。一方、以下に述べる
 第2点は、和歌の聞き手およびそれとの交渉をも視野に入れた観点である。宣長は「それ
 をきく人も、ただの詞にていふをききては いかほどあはれなるすぢをききても 感ずること
 浅し。それを詞にあやなし声を長くしてうたふときは 聞く人のあはれと感ずることもこよな
 う深し。これみな歌の自然の妙なり。」(同 p.110) と述べるが、ここでまず注意したいのは「た
 だの詞」では和歌の聞き手にも感動を伝えることが出来ない点である。またさらに、聞き手に
 感動を与えられないことは、その結果和歌の詠み手の心も不十分にしか晴らせないということ
 をも同時に意味する。宣長は和歌が詠み手の心を晴れ晴れとさせるには、聞き手という他者の
 感動が不可欠であるとするからである。「歌といふ物は 物のあはれにたへぬとき よみいで
 てをのづから心をのぶるのみにもあらず。猶心ゆかずあきたらねば人にきかせてなぐさむ物也。
 人のこれを聞いてあはれと思ふときに いたく心のはるる物也。」(同 p.112) というように、聞
 き手が和歌に籠められた感動を受け止めて「あはれ」と感動することが、詠み手の心を晴らし
 てくれるのである。この聞き手の「あはれと思ふ」とは、端的に言えば詠み手への共感である。
 「そのきく人もげにとおもひて あはれがれば いよいよこなたの心ははるる物也」(同) とい
 うように、聞き手の「げに」という共感がさらに詠み手に伝わり、その心は十二分に晴れるの
 である。⁵⁾

そして言うなれば、宣長においてはむしろ、他者の共感の方に力点が置かれている。このこ
 とは、以下に示す宣長の和歌についての考えを踏まえると明らかである。

さていひきかせたりとても 人にも我にも何の益もあらね共 いはでやみがたきは自然の
 事にして 歌も此心ばへある物なれば 人に聞する所 もつとも歌の本義にして假令の事

にあらず。(中略) 歌といふ物は、人の聞てあはれとおもふ所が大事なれば 其詞に文をなし 声ほどよく長めてうたふが 歌の本然にして 神代よりしかある事也。(中略) 心にあまる事を人にいひきかせても 其人あはれとおもはざれば 何のかひなし。あはれときかるればこそ 心はなぐさむわざなれ。されば歌は人のききて感とおもふ所が緊要也。

(同 p.112 下線は田畑による)

宣長はここで、和歌の本義、もしくは緊要とするところを、他者に聞かせ、他者がそれに感動することとしている。和歌は確かに、まずはものごとに触れて生じたなにかの感動の主体の「心をはらす」営みである。しかしその営みは、詠み手のところでとどまるのではなく、その和歌を聞き、かつその和歌に共感しうる心を持つ他者へと広がり、連なるものである。極論すればそこでは、感動による自己と他者の協働関係が成立するのである。ともあれ、和歌がこのように聞き手としての他者を想定し、その他者との間で成立する共感空間を形成するものである以上、他者に自身の感動を如何に伝えるかという点が重要になる。和歌が「ただの詞」ではないのは、詠み手の感動を十二分に籠め、聞き手の心をも動かすものでなければならぬから、換言すれば、感動によって人と人が結びつくためであると言える。

ここまでの議論を少し整理してみる。和歌が表現することの中身はまず、詠み手がある状況においてどのように感じているのかといった情の内容である。もっと言えば、それは詠み手の感動という心的内実である。詠み手にとって自身の感動を和歌の形で表出することは、本来やむにやまれぬ自然の営みである。それでは、詠み手は自身の感動をただ飾らずにありのままに表出すればいいのかというと、そうではない。深い感動は、文ある詞と長く引く声によって表される。そのことにより自身の心の晴れ晴れとした解放が達成され、聞き手とのチャンネルも開かれる。

また再三確認しているように和歌は、詠み手のみならず、必ず聞き手の反応を想定するものであった。「ただの詞」であれば聞き手の感動が伝わり、それを共感してもらう必要はない。「ただの詞」においては、ただものごとについての細かな情報が相手に伝わり事実が把握できればよいのである。ある意味そこでは、むしろ「ありのまま」が伝えられるのではないかと考えられる。そこでは話し手と聞き手の間は感動でつながるのではなく、言語が伝える細々した情報のやりとりでつながることが主眼とされるからである。たとえば夜という情報を伝えなければ、「ただの詞」であればただ夜とだけ表現すればよい。事実を描写できればいいのである。一方、和歌では夜に「ぬば玉の」とつける。⁶⁾ 文ある詞とはこのように普段の情報のやりとりでは不要と思われる言葉を付け加えて、調べを整えたものである。また宣長はこのことについて、「みかの原わきてながるるいづみ川いつみきとてかこひしかるらむ」等三首和歌の例を挙げ、詳しく説明する。⁷⁾ たとえばこの和歌では、上三句のところはいわば無用な言葉であり、詠み手

の「恋しい」と思う心は下二句で表現されているのみである。しかし宣長は、上三句の「無用の詞のあや」（同 p.113）によってことさら詠み手の伝えたい恋しい気持ちの感動が増幅されて表現されると考えるのである。「ただの詞」のやりとりというレベルで考えれば別に無くてもよい情報が表される上三句であるが、和歌のレベルで考えれば、それらは感動を一層深く伝えるために必要な言葉なのである。

以上のように、事実や情報でつながるのではなく感動によって他者と繋がる、この点においてこそ、「ただの詞」とは異なる和歌の占める位置、和歌の意味がくっきりと示されると言える。

（２）和歌の本体とはたらき

前節では、和歌と「ただの詞」の相違を自他の繋がり方も踏まえつつ、確認した。ところで宣長は、和歌の本意を『石上私淑言』巻三で体用論、すなわちその本質と作用に分けてを用いて説明している。⁸⁾ここで宣長は、和歌には戒めや政治の道具としての役割が元からあったわけではないこと、換言すれば、政治的役割や戒めが和歌の本意ではないということを、明らかにしようとしている。

先に確認したとおり、和歌とは詠み手ひとりきりの閉塞的な営みではない。それは聞き手を想定した営みであり、そこでは聞き手の反応こそが重要視されていた。聞き手の反応は詠み手と聞き手との間をつなぎ、相互交流をもたらす。その意味で和歌とは、他者に対して何らかの影響を与え、また相互にそれを介して交流するものであると言え、そこから派生して統治や日常生活など人間のありとあらゆる営みにおいて和歌が持つ力が発揮されることは当然の流れであるとも考えられよう。ただここで留意すべきことは、和歌の発祥かつ主目的は政治や訓戒にはないという点である。和歌はあくまで、物のあはれ＝感動を表現するものであった。

それでは、具体的に宣長の体用論をみてみよう。まず宣長は次のように言う。

よろづの事に その元のあるやうと それを用るうへの功德との辨へあり。これから文にいゆる體用なり。歌も本の體をいへば ただ物のあはれなることをよみいづるより外なし。さきざきもくはしくいふがごとし。さてそれを用るにつきてわれにも人にも益は多き也。これ用といふもの也。その用をいへば まづ思ふ事をよみ出れば 心につもりてたへがたきあはれをもをのづからなぐさむ。これ第一の用也。又古今序にちからをもいれずして天地をうごかし めに見えぬおに神をもあはれと思はせ 男女の中をもやはらげたけきものふの心をもなぐさむるは歌也とある。これ又大きな功用也。（中略）かく神をも人をもあはれと思はするにつきて その功德いと広くさまざま也。

（『石上私淑言』巻三 p.166）

ここで宣長は、和歌の「体」すなわち本質はものごとに触れてその感動を詠み表すことであ

るとする。一方、「用」すなわち和歌の実際の働きとしては、和歌の詠み手自身にも、それを聞く聞き手としての他者にも有益なことが多くあるとする。その筆頭として挙げられるのは、これまでも再三触れたが、和歌によって読み手の心が晴らされ、慰められるといった詠み手自身への効用である。そして次に他者にもたらされる効用としては、古今和歌集の仮名序、真名序を踏まえながら⁹⁾ 天地、鬼神、男女、勇猛な武士等多様な他者への効用が説明される。注目すべきことは、これら他者に対する効用が、その心を動かし、感動させるという地点でとどまるのではなく、それを受けて実際の行動の変化をもたらすものとして考えられていることである。つまり「あはれとおもはする」ことに連なる他者に対する影響が問題となる。この点について、宣長は次のように説明を続ける。まずは神についてはこう述べる。

まづすべてあめつちの間にある事は よきもあしきもみな神の御心よりいづる物なるが萬のわざはひおこりて上も下もやすからぬ時も あらぶる神の御心をなぐさめ奉れば のづから其わざわひはしづまりなをりておだやかになるは 力をもいれずして神をあはれとおもはする徳也。(同)

この世で生じることはあらゆる災いも含めて、神の仕業である。その神の心を和歌によって慰めるときに、人にとっての災いは治まるというのである。このことから、和歌には神の心に働きかけることにより、人智を超えた、そのままでは人間にはどうすることも出来ない事態に対しても人に益になるような状況変化を可能にする力があると宣長が考えていることが分かる。それでは次に、人間に対してはどうであろうか。宣長は、人間に対しては、1、統治者の政治への手助けという観点と、2、日常における男女や親子などの具体的な人間関係の観点の二つの点から考えている。まず前者については、宣長は以下のように言う。少し長いが引用する。

又人をあはれとおもはする功德をいはば まづ民をおさめ國をまつりごつ人は なべて世の人の情のやうをくはしくあきらめ もののあはれをしらではかなはぬ事なるに 大かた貴き人はいやしき下ざまのものの情のやうをくはしくわきまへしる事うとし。すべてとくいかめしく勢ひある人は なにごとも心に物のかなふゆへに 身にうき事をしらねば よろづ思ひやりすくなくして 賤しく貧しき物のつねにおもひおほき事をも をしはかりてあはれと思ふ心のつかぬもの也。それもやまと唐の文共にかきしるしたるをも見 又をのづから聞つたへても 大方はしらるる事なれども まさしく己がみのうへに思ひしらぬ事は 見ても聞きても猶よその事におもはれて 深く心にはしまぬ物なるを 此歌といふものは 人の心にをのがさまざま うれしくもかなしくもふかく思ふ事を ありのままに詠

みめでたるものにしあれば それを見聞くときは わが身のうへにつゆしらぬ事も 心にしみてはるかにをしはかられつつ かやうの人のかかる事にふれては かやうにおもふ物ぞ。かくすればよろこぶものぞ。かくすれば恨むるものぞといふ事の いとこまやかに わきまへしられて 天の下の人の情は ますみの鏡にうつしたらんよりもくまなく明らかに見ゆる故に をのづからあはれと思ひやらるる心のいできて 世の人のためにあしかる わざはすまじき物におもひならるる。¹⁰⁾ (同 p.167。 下線は田畑による)

ここでは、統治者は民の情を詳しく知り、民の情に沿った政治をすべきであり、逆に言えば人の情をよく知ることこそがよい統治に繋がるといった宣長なりの統治及び統治者観が表れている。こうした見方を踏まえながら考えると、和歌の効用とは端的に言えば、民の情を詳しく事細かに、正しく統治者に伝えることである。そしてそのことによって結果的に、統治者がよい政治を行うことを可能にすることである。さらにここで注目すべきことは、和歌によって民の情を明らかに知ることが、民に対するひどい振舞いの抑制につながるとされることである。統治者は和歌に即して、自分とは立場の異なる下々の民の物の感じ方や情のありようを知る。その知り方は「いとこまやかにわきまへしられて」というように一見知的な分析的理解に見えるが、其の知に至る前提としては、和歌の内容が統治者の「心にしみて」つまり奥深く浸透し、かつそれによって民の情を一層深く「をしはか」ることができるということがある。つまり、統治者が民の情を深く適切に知るのには、まさしく感動によってなのである。そしてこの感動こそが統治者の行為にも作用し、統治の質にも直接的に影響を与えるるのである。

またこの引用からは、人間理解に関する次のような宣長の主張が読み取れる。まず第1点は、生活環境や地位の異なる者の理解の困難さである。たとえば引用にもあるように、統治者は生活に困窮することもないので、貧窮にあえぐ人の状況や心情が理解しがたい。その結果、そういう人への配慮ができず、その立場の人のつらさかなしさを切実に思い取ることはできない。これは統治者に非があるというよりはむしろ、人間は自分自身から遠い存在のことはそのままの状態だと理解しがたいという、人間存在一般の人間理解の傾向性を示すものと考えられる。このことと関連するが、第2点として、人間は自分がその身で経験したことでなければ想像しにくく、また理解しがたいというような、自らの経験からの距離如何で対象物の理解の度合いが決まるということが挙げられる。自分との質的差異が甚だしいこと、自分の経験とかけ離れていることは、概して当の存在に「深く身にしまぬ」、つまり深いインパクトを与えない。換言すれば、その人の心に訴えるものが少なく、心を動かさないとと言ってもよかろう。そのまま何もしない場合には心を動かす機縁を持たない対象に対して、心が動くようになる。和歌はそのための条件を備えるのであろう。感動が介さなければ、関わり合うことが少なかったであろう人と人が、和歌によって繋がりをうるのである。

それでは次に、後者について宣長はどのような見解を持つのであろうか。

只よのつねのまじらひにつけても この物のあはれといふ事をしらぬ人は よろづに思ひやりなくして 心こはごはしくなさけなき事のみ多き物也。すべて何事もそのことにふれざれば 其事の心ばへはしられぬものにて 富める人は貧しき人の心をしらず。わかき人は老たる人の心を知らず。男は女の心をしらず。世の諺にも親の心子しらず共 又子をもちて親の恩はしるともいへるに 兼輔中納言の
人のおやの心は闇にあらね共子をおもふ道にまどひぬるかな といふ歌 俊成三位の病かぎりなりし時に 定家卿中将轉任の事申すとて 範光朝臣のもとへをくられし
をざゝはら風まつ露のきえやらでこのひとふしをおもひをくかな といふ歌などをきけば 子もたらぬ人もをのづから親の心は思ひやられてあはれなるぞかし。(同 pp.167-168)

日常における人間関係においても先ほどと同様に、経験がなかったり自分とは遠く異質な存在については、その心を知ることは、何もしないままならば不可能であるか限りなく難しい。しかし、ここで例示されているように、たとえ子供を持っていない人でも、子供のためを思う親の切実な情が詠み込まれたあはれ深い和歌を介して、その情を切実に深く知ることができるのである。いわば和歌は、その人が経験していないことがらとその人とを会わせることによって、換言すれば、そうしなければ心の向かわなかった方向へとその心に向けさせることによってその人の限られた経験を広げさせ、また心が動く幅を増やすのではなからうか。

そして、宣長は次のように締めくくる。

此外の事もみなこれと同じ心ばへにて 世の人のをのがさまざまほどにつけつみのうへにおもふ心は みなよくくみてしらるれば みづから其事にふれねども 其事の心ばへを思ひしるは歌なり。人の情のやうを深く思ひしるときは をのづから世のため人のためにあしきわざはせぬ物也。これ又物のあはれをしらす功德也。かく人の心にくみてあはれと思ふにつきては をのづから身のいましめになる事も多かるべし。まづ右の歌など聞て親の子をおもふ情ををしはかりなば その恩をしりてをのづから不孝のふるまひはすまじき物に思ひなりぬべし。その外もこれに准へておもふべし。此外なを物のあはれをしらすにつきて その益おほかるべき物ぞ。(同 p.168. 下線は田畑による)

つまり、宣長は人間存在一般に「もののあはれ」を知らせるということを和歌の持つ効用として考えている。そして、重要なのは和歌に出会った人の心の行く先である。和歌に表された情に感動し、深く心を動かされた人は、次に「人の心にくみ」て「あはれと思」ったり「情を

をしはかる」。さらにこの段階は先ほどの引用箇所内にも「をのづから…思ひやられて」とあったように、「をのづから」和歌の聞き手の心に変化をもたらす。その変化は、感動そのものというよりはむしろ、感動を踏まえて生じてきたその人なりの直面していることがら、ものごとに対する態度決定 - 自分はどう振る舞うべきなのかということを決めること - といってもよいような変化である。面白いことに、段階は踏んでいるもののこの間の流れは実にスムーズである。「をのづから」というなめらかなリズムによって、和歌の聞き手の心は、感動によって情を深く理解した故に自らの身を戒めたり、他者を傷つけたり嫌がらせる行為を抑制したり、あるいは他者に益をもたらすといったような方向へと向かう。和歌の「用」とはこうした人と人とが実際にどのように関わり合うのかということにも及ぶものなのである。

しかしながらこの点を強調しすぎると、和歌が身の戒めや統治を主目的とするものという考えに結びついてしまう。宣長は、慎重にその線を断ち切る。¹¹⁾ 和歌の本質即ち本意は、あくまで人間の情=感動を表現することであった。ただ表現されたものを人間がどう生かすのかというときに、感動による他者理解の深まりが、様々な具体的な効用を人間関係においてもたらすのである。以上のことから、宣長における和歌は感動を表現し伝達するものであると一旦まとめておく。

二、第八一項「歌は詩よりもあはれ深き事」の考察

(1) 和歌と漢詩の共通性

以上、第一章では和歌とはどういうものかについて、「ただの詞」等とも比較しながら、また本体と働きに着目しながら明らかにした。

ところで、漢詩は情を陳べるものとして中国で和歌と同等の位置、役割にあると考えられる。それでは漢詩と和歌とは、どのように違うのであろうか。基本的に宣長は、「物をあはれとおもはすることは詩よりも猶まさりて、まさしくそのためしも古へよりいとおほかる事なり。」(同 p.166) というように、人に感動を与える点において和歌は漢詩よりも勝っていると考えている。このことは換言すれば和歌の方が漢詩や普通の言葉よりも、他者に対する影響力が強いということである。もっと言えば和歌は、他者の感動を喚起することによって他者の行動を変えうる力をほかの言語表現体よりも持つということにもなる。日野龍夫は「感動による説得」という言葉を使ってこの点を説明するが¹²⁾、宣長は和歌が他者の心の奥深いところに働きかける力があることを示そうとしていると言える。

他者を感動させることにおける和歌の漢詩に対する優越性は、『石上私淑言』巻三第八一項で具体的に例を用いて説明されている。ここでは、厳密には儒学の教え=書物による説得との比較にも触れられているが、宣長にとっては、儒学と漢詩はいずれも、背景に日本とは異質な中国の人性の特徴を踏まえて成立するものとして位置づけられ、その点で和歌と一線を画すも

のとされていると言える。

ただやはり、誤解がないように述べておくと、宣長は和歌と漢詩はいずれも根底では人間の情を表現するものであり、その点で同じ本質を持つものとして考えている。つまり和歌と「ただの詞」が本質的に役割を異にしているのとは違い、和歌と漢詩の基本は同じなのである。「詩のことはしらねど ふるきふみどもにいへるをかたはし見れば そのもとの心ばへはもはら于多と同じ物と聞えたり。げに風雅【詩経】三百篇の詩をみるに ことばこそ唐めきたれ 心ばへはわが御國の歌といささかもかはることなし。」(同巻二 p.149) というように、その趣や風情は和歌と漢詩は変わることがないと言う。また宣長は、「まづから國にても詩といふ物は 此の歌ともはら同じかるべきものにこそあれ 世のことはりをこまやかにいいのべ うちつけに事の心をときしらす物にはあらず」(同巻三 p.169) というように、漢詩は元来世の中の出来事を筋道通りに詳しく述べ伝え、説明するものではないとも言う。つまり、和歌も漢詩も人間の情を表現するものという点では同じなのである。さらに、宣長がより明確に漢詩の本意について述べている箇所を確認してみる。宣長は真実めいて整然たる経書と漢詩との区別を踏まえつつ次のように述べる。

詩はもと(経書のように ※田畑注) さやうにはかばかしうしたかかなるべき物にはあらず。かの詩経を見よ。ただすなをにはかなだちて 後の世のやうにさかしげなる心は見えず。そこそは詩の本意なるべきを あしう心得てかの経学の心ばへをもとかくつきづきしう説なす人のみおほく 又此方の人はその詞のからめきたるにまどひて みな道々しき事ぞとのみおもふ。これらはみな詩の義にもたがひ 孔子の心にも背けり。其故は 詩はもと人の性情を吟詠するわざなれば ただものはかなく女わらはべの言めきてあるべき也。

(同巻二 pp.150-151 下線は田畑)

そもそも経書と漢詩は性質を異にするものであり、漢詩の本質は「人の性情」の吟詠であった。そこに表される人間の情は中国と日本で、国が変わろうとその本質は変わらない。人間の情は普遍的にすなおではかなく、また女々しいものという性質を持つ。漢詩はそうした人情の本性が表されていると、宣長は考える。ただし後世、中国の人が漢詩を経学の趣旨に似つかわしく解釈したりし、わが国でもそれを受け入れて、漢詩というのは才知に富み、理屈っぽいのがその性質だとしてしまったが、それらのありようは漢詩の本質を捉え損ねているのである。

漢詩が万国共通の女々しく弱々しくはかないものとしての人情を表すものであり、その点で和歌と同質であるという宣長の理解は、次の箇所からも分かる。

詩歌といふ物は 思ひむすぼゝれて心にあまるすぢを詠め出るわざにて かの箕子てふ人

のやうに かなしさを堪忍びて これは不可これは近婦人などやうに こころのうはべを
 やういするにせかれては いよいよかなしくむねにせまりて堪がたければこそ 詩に詠め
 出てそのかなしさをばはるけやれる物なれば 其詩はかならず女々しからではかなはぬ事
 也。もし雄々しくつくろひていひ出たらんには 何によりてかは欲泣ばかりのかなしさは
 はるくべきぞは。されば詩歌はこと書のやうに とあらんかくあらんとよろづにつくろひ
 かまへていふべきならず。ただよくもあしくも思ふ心のありのまゝなるべきことなるを
 今の様に是は不可それは近婦人といふ心ばへなるかしこき詩は詩の本意にはあらず。ただ
 物はかなく女々しげなる此方の歌ぞ詩歌の本意なるとはいふ也。¹³⁾ (同 p.153 下線は田畑)

ここからも分かるように、漢詩は和歌と同様に、心に鬱屈して堪えきれない思いの深さを表現するものである。また、表現することによって心は晴らされ、慰められる。もちろんこのとき、詠み手が堪えきれず抱える真の感情を、その女々しさはかなさをごまかさず取り繕わずに表現することが重要である。雄々しく取り繕い、悲しみに堪えられない真の感情を表に出さない場合は、心は晴れない。宣長がこう述べる時、漢詩であれ和歌であれ人間の真の情が表現されるものであるという点が重要である。そもそも漢詩も、真の情を取り繕わず表現するものとしてあり、そしてそれゆえに詠み手の心が晴れるという効用をも持つのである。

またさらに、宣長は同じ箇所直前で、子供を亡くしたときの父と母の反応について説明している。¹⁴⁾ 子供を亡くして堪えがたい悲しみにとらわれたとき、母はその感情を素直に外に出すが、父は取り繕い、その感情をそのまま出さない。しかしこのことは、父が非情だということを示すのではない。父も母も子供を亡くして悲しい情を持つことは共通している。父も母も人間としての真の情を持つからである。ただ父の場合は、「人めをつゝみ世にはづる」(同) 気持ちによって真の悲しみを取り繕い、そのままの形で表出しない。表に出すか否かの違いなのである。真の情をはかなく悪いものだとし、おしとどめるのが賢こぶり、あれこれと表面をきれいに整え道理に沿おうとする所謂「漢意 (からごころ)」である。漢詩は、後世漢意によりその本質が隠れてしまったとはいえ、本来は普遍的な人間の情に基づくものであり、それを取り繕うことなく女々しくはかなく表現する点で、和歌と同質なのである。¹⁵⁾

さらに宣長は、『詩経』に基づいて「から國の詩序に 動天地感鬼神莫近於詩といへるより出たることながら これは歌ももはら同じ事にて」(同巻三 p.166) とし、漢詩にも感動により天地や鬼神に影響を与える力があるとして、その共通性を指摘している。したがって、漢詩が他者に全く感動を与えないわけではない。ただの詞が全く感動を与えないものであったことと比すれば、漢詩と和歌は類似している。ただし、問題はその深浅であると言える。

それではなぜ、和歌と漢詩の本質は同じであったはずにもかかわらず、両者の間に差異があるのか。換言すればなぜ他者に感動を与える際に、深浅があるのだろうか。¹⁶⁾ この点を明ら

にするために、以下第八一項を手がかりにして考察していくこととする。

(2) 他者の説得

宣長は和歌も漢詩も人に感動を与えるものとはするが、和歌の力の漢詩に対する優越性を、人を殺そうとする人への説得の場面を例にして説明する。それが第八一項である。他者の深い理解を導くには、細々と筋道を説明することはあまり意味がないと宣長は考えている。しかし、世間の人の理解はちょうどそれと反対であるようである。このことは、本項で宣長が設定している問いに以下のようにあることから推察できる。「歌よりも詩は こまやかに世の道理をいひ 事のころをのべたる物なれば 人をも神をも感ぜしむる事深かるべき事なるに 物をあはれと思はすることは 詩よりも歌をまさるとさきにいへるはいかにぞとおぼゆ」(同巻三 p.169) この問いは、漢詩や和歌を巡って当然出てくるであろう世人の感覚を代表させていると考えられる。すなわち世人は、筋道を立てて沢山の情報を理路整然と伝えた方が相手により深く伝わると考えているであろうということである。このことは、現代人の我々からしても納得できるであろう。多く情報があり、詳しく筋道立てて説明してもらった方がそのことについての理解が深まるのはおかしなことではない。寧ろ当然であろう。

ただここで気をつけるべきことが2点ある。まず第1点は、漢詩を巡るイメージと実状である。さきに確認したように、漢詩は和歌と根底では同じではあった。ただ後世の中国において経書の持つ「ことごとしさ」をその性質として身にまとうようになってしまった。世人の漢詩に対するイメージは、経書と同様ものごとの本質を詳しく道筋を立ててまことしやかに論ずるものとなった。¹⁷⁾ そしてさらに、漢詩自体も、宣長が認める『詩経』以後のそれは、中国の「いさゝかなること人も人のよしあしをこちたく論らひ なに事もわれがしこに物いふ」(同巻二 p.149) といった「國のならはし」(=風俗・習慣、及びそれらによって形成された価値基準)によって、実質的に中身がそのイメージ通りになってもいた。¹⁸⁾ そのような背景から世人は、漢詩であれば和歌と比べるとものごとを詳しく説明するものだから、他者にものごとを一層明確に詳しく伝えられるし、他者の心に響くと考えているだろうということである。

次に第2点は、第1点の後半とつながるが、問いで取りざたされているのは「物をあはれと思はする」ことであるという点である。深い理解というとき、厳密には他者を深く感動させる度合いが問題となっている。結論的なことを言うと、宣長にとっては深い感動がものごとの本質への深い理解をもたらすのであるが、宣長はそもそも漢詩ではそうした深い理解に連なる深い感動をもたらすことができないと考える。整理すれば、世人は物の道理を多く説明する方が深い感動=深い理解に繋がると考えているが、宣長はそう取らないのである。それはなぜか。第八一項冒頭で宣長はこう述べる。

されどさきざきもいへるやうに かの國は人の心さかしだちて こちたき事を好むならば
 しなる故に 詩もただその方にまっはれて異ふみも同じやうに ことさらに道々しき事を
 いひつらねて 人をさとしいましめ あるは時のまつりごとをそしりなど すべてあやに
 くに物のことはりをたてむとかまへて作るゆへに うち聞にかしこくはあめれど にくき
かたまじりて 中々に人の心に深くはそまねば まして鬼神の感ぜんことは いとおぼつ
 かなし。(同巻三 pp.169-170 下線は田畑)

端的に言えば漢詩は、鬼神を感動させるどころか、日常を共にする人の心にも深く染み入ることもできない。漢詩においてはむしろ、他者の心に深く染みていくどころか逆に、深く心に浸透していくことを妨げる要素が生じるという。その要素が生じるのは、漢詩が賢こぶり、物の道理を細々と詳しく説明する形で作られているからである。そしてその要素とは、「にくきかた」すなわち気に入らない、腹立たしい、不快だという感情である。この感情は、人と人を結びつけるというよりは逆に隔てさせる感情であると言えよう。それは、相手の感情や、伝えようとしていることを共有し、理解し、受け入れようという気持ちにならせるのではなく、逆に、相手と自己との間の距離を作るものであろう。不快だ、気に入らないとは、拒絶や否定を大いに含む感情だからである。後にも触れることとなるが、この「にくきかた」という感情が聞き手に生じるとき、それが詠み手への全幅の共感を妨げると考えられる。そのため、感動が浅くなるのである。もちろん漢詩は悪い点ばかりではない。道理に沿って細々説明することは、聞き手には「かしこく」聞こえる。つまり、言っていることがもっともであり、立派ですばらしいように聞こえる。漢詩で伝えようとしていることは、「かしこさ」の点ではその価値を聞き手に認められるのである。しかし注意したいことは、「かしこく」聞こえることと「人の心に深く」浸透して感動を与えることとは別のことであり、むしろ前者と後者は両立しないということである。そして、宣長がここで重視するのは後者の方、感動を与える力の方なのである。

このように漢詩は、感動の深さの点で、換言すれば共感をもたらすか否かという点で和歌に比べて至らないと言える。宣長は、このことすなわち和歌の力の漢詩に対する優越性を説明するため、具体的な譬えを挙げて説明する。以下長いがまずは、その譬えを引用する。

たとへを引てその心ばへをいはば よに罪なき人ふたりをとらへて、殺さんとする者あらんに
 かたはらよりそれを見ていとおしく思ひ さなせそとてせちにもたる刀をうばゝむ
 とすれ共 さらに聞入ねば 又一人が立よりて すゞろに人ころすはよにあしき事のよし
 をねんごろにさとしつゝ 物によそへなどして事の心をいとのだやかにとききかするに
 すこしはげにと思へるけしきの有ながらも おもひとゞまる迄はあらで 猶きりてんとす
 るに とらへられたるが一人はいさぎよくおもひとりたるけしきにて 何事もみなさるべ

きにこそと思へば かくてしなんも命は露おしからず。たゞ横さまに人ころす人のゆくゑ
こそいとおしけれ。まさによき事有なんやなどやうにいふに いよいよはらただしくなり
て 終にこのひとりをおぼえぬ。さて今一人はこよなうかなしがりて ひたふるにな
きまどひつゝ物もおぼえずふしづみて 額に手をあててたゞあが君命たすけ給へ給へ
のみよばふにぞ 岩木ならぬ心はさすがにあはれとおもひなりて 刀をすててゆるしや
りにける。(同 p.170)

ここでは、人を殺そうとしている人に対しての傍で見ている人の行動と、殺されようとして
いる人の行動が経書や漢詩、和歌の譬えとして挙げられている。宣長は次のように解説する。

これになずらへて詩と歌とのけぢめを思ひわくべし。かのかたはらなる人の さなさそと
せちにいさめしは もろもろのから書にうちつけに人のあしきをいましめたるがごとし。
又ひとりが 殺すまじき理を物によそへてのどやかにいひしらせしは 詩のごとく也。そ
のだうりを聞てかつがつけにとおもひながらも 猶よその事なれば深く心にしまぬ故に
聞いれてやむる迄はえあらず。さてかのころされんとする一人が物きよくいへるも又詩の
ごとし、をのれはつゆかなしからぬさまを見せ たゞ人ころす咎のおそろしき事を思はせ
て 難をのがれんとはかれるところはかしこけれど あはれなる事なく なかなかにく
くおもはるゝ方あれば いよいよひとのいかりをばそふるぞかし、大方から人のふるまひ
はみなかうやうのたぐひ也。(同 pp.170-171)

まずここに挙げたのは、経書と漢詩の譬えについてである。まず最初の傍らの人がそんなこ
とをしてはいけないときつく諫めた行為は、経書において悪の行為を戒めていることの譬えで
あるという。それは善悪是非を道理で裁断する行為である。譬えにもあるようにこの人は禁止
の命令できつく言い渡し、力づくで刀を奪おうとすることで人殺しという悪を阻止しようと
しているが、これは理でもって、強いて他者の行為を変化させようとする方法である。この方法
では、人を殺そうとしている人は全くその主張を聞き入れない。人を殺すなという主張は、全
くその心に響きも届きもしないのである。たとえ正しい判断に基づいて正しい行為をするにせ
よ - 実際、人殺しを止めるのは正しい行為であろう -、このような強引に他者を自身に従わせ
ようという無理じいの態度は、宣長によればひとつも他者との間に通路を開かない。つまりは
説得は失敗している。そのような態度は他者に感動を与えることはないし、いわんや共感もも
たらさないのは火を見るより明らかなのである。

ところで経書は、「まことしくうるはしき事を尊ぶ」(同巻二 p.150)、すなわち真実味に満ち、
整然としていることに重き価値を置くが、この点について宣長は次のように言う。

いはゆる経学などはかの國にても所せくこちたき教へにて、いささかのみじろぎも易からず、とにかくに人のよきあしき事をさがなくいひかゝづらふをのみいみじき事にして たをやぎたる風雅のおもむきは露しらず。(同 p.150)

つまり経書の説き方は、道理に基づいてはいるがそれ故に道理に基づいて主張する側に圧倒的な主導権があり、他者を容赦なく裁くものであった。そのような態度は他者に窮屈さや身じろぎも出来ない緊張を味わわせることとなろう。またそれは、他者との距離を適切に取るのではなく、強引に他者を自身に引き寄せるあり方である。そのあり方には余裕がなく、風雅やものあはれを感じさせる要素が全く混じることはなく、むしろそれらとは対極にある。つまり、風雅とは対極にあり、理がむき出しになることでかえって人と人との距離が遠くなるやり方が、経書による説得なのである。経書による説得で聞き手の心が閉じられてしまうのは、説得する側が作り出すスキのなさにあると言える。この方法は確かに、善悪是非をきっちりと明らかにしなければならないときや、議論をしていて自身の主張を強めたいときは有効な点もあろうが、ここで問題になっているのは、人の心への届かなさである。つまり宣長から見ると、経書の教えは「さがなき」ものであり、人と人をつなぐどころか逆に隔てを作るものなのである。理は確かに正しいが、その切迫した主張は余裕や潤いのない人と人とのつながりを形成する。余裕や潤いのない直接的な説得は、人の心に届かず、したがってその行為の変化をもたらさないのである。

それでは、漢詩はどうか。この漢詩に該当する譬えは、2パターンある。まずひとつめは、見ている人の説得である。殺してはいけない道理を直接ではなく物になぞらえつつ、また穏やかな調子で伝えることである。聞き手はその道理になるほどと納得はするが、それは心の奥深くには染み込んでいかない。つまりは殺される側の人にとってその気持ちを理解するほどには、その理解は深まらないのである。人殺しはいけないという理を頭で納得させることはできても、眼前の人に対する自身の行為の変化にはつながらないのである。

次に二つめは、殺されようとする立場にある人の態度である。この人はひとつも悲しさや弱々しさを見せず取り繕う。傍目から見ると死ぬことは何ともないというように潔く振る舞う。それどころか、人殺しなどしたら後の世に受ける報いが心配であるなどと殺そうとしている人の行く末を憐れんだりするのである。この場合はなお結果が悪く、そうした態度をまのあたりにした人は「はらただしく」なってその人を殺してしまうのである。

いずれにしても、漢詩による説得は失敗に終わるのであるが、宣長は前者については深い感動を催さない故に結果に繋がらないことを指摘する。後者についてはその工夫は「かしこし」と認めるものの¹⁹⁾、かえってその工夫が聞き手に感動をもたらすどころか怒りや憎しみなど

マイナスの感情を抱かせてしまい、逆効果になったことを指摘する。こうして宣長は、経書及び漢詩による説得は、中国人の振るまいとして多くあるもので、いずれも成功しないとして漢詩と経書の説得をひとまとめにして同列に扱っている。

振り返れば、漢詩はそもそもは和歌と同質であった。しかし、「かしこの人ごゝろはすべてさかしげなるをたふとひて いさゝかなるわざにも人のよしあしをこちたく論らひ なに事もわれがしこに物いふ」(同巻二 p.149) といったかしこぶる中国の人性の傾向性や習俗により、漢詩は経書の性質を帯び、「人情のあはれなるすぢはうせて いひといふ事ことごとしくしたたか」(同) に変化したのである。つまり、漢詩は人情の真実を素直に取り繕うことなく表現するものというよりは、経書のように大層に厳めしく表現するものとなり、経書と性質を共有するものとなったのである。そうした漢詩は、「いつはれるうはべの情」(同巻二 p.151) を表現するものとして、和歌とは別のもとの位置づけられるのである。

そして、宣長が問題視する経書や漢詩の特徴で注目すべきなのは、それらが「われがしこに」あるいは「をのれかしこからん」(同) として、自分が他者より優越していることを示したいという気持ちや、弱みを見せて他者に変に思われたりばかにされたりしたくないというような、他者から自分がどう見られるのかといった点にばかり気を払うことではないかと考えられる。その場合、人は自身の真を自身に対しても隠している。他者に向かうときは言うまでもない。自身を隠し、表面のみで取り繕い、挙げ句の果てには人より優越したい、人に勝ちたいというような自己中心的なところが、経書や漢詩の特徴であり、それを宣長は嫌うのである。他者の目を気にして、よくみられたい、賢く見られたいというところに気持ちが集中した形で他者に向かって何か表現するとすれば、それが他者の感動や共感をもたらすのは難しいことは容易に理解できる。例にもあったように、それは逆に怒りやにくしみを生じさせるが、それは、おそらく経書や漢詩にこめられた自己中心の汚い心性が伝わってしまうからでもあるのだろう。思いを共有しようという気持ちよりも、智でねじ伏せたり、我を主張したいという思いが勝つところで、人と人を隔てさせる憎しみや怒りが生じるのである。その結果、説得は失敗する。

それでは、和歌の場合はどうなのであろうか。宣長は次のように説明する。

さて今一人がひたふるにかなしひまどひて たゞたけき事とはたすけ給へたすけ給へといへるは歌のごとし。まことに人わろくめゝしく 何のことはりも聞えずいとたくなゝるわざなれども おもひもかけずすゝろにころされなんとするおりの心のうち まことはだれもかゝるべきわざにて 其のかなしさをつゝまずつくろはず ありのまゝにふるまひたる故に 其の有さまを目のまへに見聞ては いかにたけきものふも 其の心を推量てを のづからあはれと思ふ心はいでくる也。(巻三 p.171 下線は田畑)

和歌に該当する譬えは、殺されようとしている人の素直な振る舞いである。死に直面して悲しいという心情を、道理に沿ってくどくど説明したりするわけではないが、ともかく素直に表現すると、人を殺そうとしている人の心に奥深く届くというのである。そして実際、この振る舞いのみが人殺しの心に届き、その人は自身が殺されることを免れることが出来たのである。人殺しの側から言えば、現前の人の振る舞いに対して自然にその人の心情を推し量って「殺されたくない」という心情を理解し、その上で行為を変化させたのである。つまりは説得に成功したのである。このように、和歌自身の女々しくはかない心情を素直に表現するあり方²⁰⁾は、これまでの経書と漢詩と比較すると、他者を深く感動させることができ、それ故に他者の行為に変化をもたらす点で格段に効果をあげるものであった。和歌による説得が一番なのである。

そして重要なことは、他者の行為の変化は、感動から連動して起こった道理の真の理解により行われるということである。この例の場合も、直接人殺しが見聞したのは殺されようとする人の殺されたくない、悲しいという心情のみであった。しかしそこから人殺しは、「人を殺してはいけない」という道理を掴み、実行するのである。道理の伝わり具合は、感動と比例するのである。このことに関して、宣長はさらにさきの兼輔の和歌の例を引いて、漢詩との相違も含めて説明する。

かの兼輔卿の歌などをこゝに引あはせて 萬の事をもなずらへしるべし。いはば詩はたゞ父母には孝をつくすべきことはりを物にたとへなどしてしらせたらんがごとし。きく人げにさる事とはおもへども あはれとおもふかたうすければ猶心にはしむ事浅し。すべてなに事もことさらにかまへいでて 事のだうりをこちたくいひしらせて人をさとさんとたくめる事は かへりてげにとおもはぬ事おほく たとひ其おりにはげにさもある事と深くおもはるやうなるも猶さめやすき物也。然るをこの歌はかの人の親のとよめるやうに 親のめぐみのふかきよしをいはず 孝をつくすべきことはりをものべざれども 只子を思ふ心のゆくゑを 物はかなく有のまゝにながめ出たるにて 親の心のあはれに思ひやらるゝ故に たれさとさねどもをのづからそのめぐみの深き事をも思ひしり 孝をつくすべき理をもさとるぞかし。これをのが心からじねんに思ひとる事ゆゑに 心にしむことあさからず。かくてぞ何事のだうりをもよく明らめてふかく物の心はしる事なりける。

(同巻三 p.171 下線は田畑)

この例にもあるように、漢詩では伝えたい道理 - ここでは孝行をつくすべきこと - をそのままでないにしろ物に譬えなどして工夫して説明する。その場合、聞き手を納得させることは出来る。しかし、ここから先が重要で、その納得という状態は一時的であり、持続しないというのである。そのわけは、漢詩の表現では人に感動を与え、その心奥深くに染み入ることができ

ないからである。納得が持続するには、深い感動が不可欠なのである。

一方、和歌では伝えたい道理はどんな形であれ一つも表に出さない。具体的に、親の子を思う深い心情を表現するのみである。しかし、和歌に示された親の子を思う心情は、聞き手に自然とその心情に感動、共感をもたらす。そしてそれだけではなく、その心情に基づいて親というものがどれほど子供を大事に思い、どれだけの親の恩恵や愛情を子供は注がれているのかといったこと、ひいては、そうした恩恵や愛情を沢山注いでくれる親を大切にしなければという孝行の道理までも、聞き手は理解することになるのである。

ここで注意したいことは、親の恩恵の深さや孝行の道理を聞き手が「をのが心からじねんに」把握していることである。ここでは経書や漢詩におけるような、ある伝えたいことがらを強制的に、もしくは作為的に伝えることはしていない。むしろ、聞き手への伝わり方は自然である。感動から具体的な道理把握への一連の流れでのキーポイントは、この「をのづから」＝「じねん」であると言える。たくまず、聞き手側が自然に、主体的に心を動かす。そのことが深い理解をもたらす、道理の真の把握にまで繋がる。このことは換言すれば次のようになるであろう。つまり深い感動こそが、真の深い理解をもたらすのである。その感動もまた、「感動させてやろう」というような巧みや作為を前提とするものではない。誤解を恐れず言えば、主権は聞き手の側にある。そしてだからこそ、他者に強いられたのではないものであるからこそ、深い心奥深くまでの感動が、そして自然なその状況に即した道理の理解が可能となるのである。

また、誤解の無いように言っておくと、だからといって何か理を教えるために和歌を作ろう、としたのならば、それは本末転倒になるであろう。ここでの道理理解は、結果的にもたらされるものだからである。もちろん、『直毘霊』など神道論に及べば、儒教の教説の不要さやわが国の人の元々の心の清さなどが指摘され、わざわざ孝行が大事などと言挙げしなくとも理がわかっているありようが説明される。しかし、ここでは問題がずれてしまうので深入りせず、元に戻るが、重要なのは、感動ということである。『石上私淑言』卷三第八一項では、以上のように作為や巧みや自己中心的なあり方に満ちた漢詩よりも、人間の本質的な人情を表現する和歌の方が、その聞き手に自然な形で感動をもたらすことを見た。そして、その感動の深さは、伝えられる状況に関わるものごとの道理までも、深く真に相手に届けるものであった。それは感動の深さが、聞き手の主体性を確保し、聞き手がおのづから自身の心の動きの中で、理ものごとの本質を掴むことを可能にするということでもあった。それはもはや、頭だけの表面的な理解にはとどまらなかった。だからこそ、教えられなくても自然に自力で聞き手は、道理にも辿り着くのである。他者の真の説得は、その意味で和歌においてのみ成功すると言える。つまり感動の深さこそが、実は我々をとりまくあらゆるものごとの真の理解と不可分につながっており、人と人とをつなぎ、ひいては人と人とのあいだにおりなす道理の理解をも可能にするのである。

三、まとめ —和歌の力—

以上、宣長によれば、情による説得の方が理に添った知的理解よりも人の心に深く分け入り、核心をつかませることができるということになる。つまり人間というのは、知的説得、知的理解よりも、情による方がものごとを本質的に理解できるのである。これは、「あはれの深さ」が人の心により大きなインパクトを与え、人の心を奥底から揺り動かすゆえに、伝えられることの本質へと人を結びつけるということではなからうか。聞き手の「情の動き」は、眼前で示される人の情およびありようをその本質において捉えうる。換言すれば、情が動くからこそそれが可能なのであり、人の情を動かすためにはその手続きとして和歌が必要なのである。そしてこのような深い理解は、自身の心身丸ごとでの他者の心身丸ごとの実感、すなわち自他の心身丸ごとの存在の間で生じる理解なのではなからうか。しかもその深い理解は、感動を介さないただの理解であれば、その相互の距離の遠さを埋めることができないもの同士をも近づけさせる。同様の経験を共有していなくとも、似たような生活環境や価値観を持っていなくても、それ故に空いた隔絶は、和歌による感動により、橋が架けられる。この人と人の間に深い理解をもたらす力、いわば感動で人をつなぐ力が、宣長の見いだした和歌の力なのである。

以上の宣長の考え方は、情における倫理にも結びつく可能性を持つとも言えよう。倫理を単なる道義的な意味にとどまらずに、人間と人間とが織りなす関係のあり方というように拡大解釈をしたとすれば、それは感動で関係が成り立つという倫理のありようを提示しているとも言えよう。それはともかく、何かを本質的に掴むというとき、それはたとえば「人を傷つけてはならない」「親は子を深く愛するものだ」等道徳的なレベルの問題においても当てはまる。その場合、人はただ感動するだけではなく、実際の行為へとおのずと赴く。実際に人を傷つけたり、親不孝になることはしなくなるのである。そうすると、和歌の役割として、表面的には人を説得したり、教化したりする戒めの役割が前面に出てくるが、あくまで見逃すべきでないのは、和歌の出発点は感動を表し、伝えることにあるという点である。説得して行動を促すために和歌を詠むというのは、主目的ではない。それにおのずと附随する具体的な実践的行為は、あくまで結果的なものである。しかしながら、宣長が人間における他者理解を考えると、理によるのではない情におけるより深い繋がりを想定し、その繋がり方にこそ人間の本来的な姿を見いだそうとしていたということは言えるのではないか。相互に動く心を持つもの同士が、その心身の共振・共感によって、本質的に繋がり合うのである。そしてそれを可能にする力が、和歌において発揮されるのである。

さらにもうひとつ言いたいことは、和歌の力についての考えの根底には、そのような和歌の力を生かすことの出来る情の力を人間が共通して持つという、人間の普遍性への信頼に満ちた宣長のまなざしが存するという点である。和歌の力は、和歌を詠まざるを得ない「動く」情

の持ち主 - 岩木ならぬ人間存在 - において、そして他者を意識して情を表現し、その情の共有による自他の連なりを志向できる人間存在においてはじめて、真に働くのである。その意味で和歌の力は、人間存在の根底全体に働く根源的なものと言ってもよいだろう。極論すれば、人間は感動を本質とする存在なのである。²¹⁾

以上、今回は歌論、特に『石上私淑言』に即して考察したが、ここで明らかになった情の倫理は神道論において一層深まり、確実なかたちで示されると考えられる。いうなれば、人間の生の営みを支える神の道が、人間における情の倫理の根拠になるのである。本稿では論じきれないのでここでは問題を提起するに留め、機会を改めて考察したい。²²⁾

また今回、感動による説得がなぜ実際の具体的な実践に繋がりをうのか、換言すれば理よりも感動の方が実践に繋がりがやすいのはなぜかという大きな問題については、単なる物事への理解の深さという浅いレベルの考察にしか至れず、十分説得力ある議論に踏み込めなかった。たとえば、にくしみやいかりやことごとしきは どうして人と人の深い理解の妨げとなるのかについては、踏み込めなかった。この点の不十分さは、神道論を含め宣長論の全体を考察していない手法の偏りによるものと思われる。ともあれ情の倫理 - 共感倫理 - のほうが理主導の倫理に比べて有効性が高いのはなぜか、心の深いところでの他者理解は真の理解として行との一致をもたらすのか、この辺りについては倫理学の問題としても取り組むべき重要な問いであるので、今後の検討課題として挙げておき、今回の考察はここで閉じることとする。

注

- 1) 拙稿「弱さ」を受容するということ - 本居宣長「物のあはれ論」に即して (『富山大学人文学部紀要』第52号) 富山大学人文学部 2010.2 参照。
- 2) 『石上私淑言』巻一、大久保正編『本居宣長全集』第二巻 筑摩書房 1968 所収。以下『石上私淑言』からの引用は本書によるものとし、原則巻数とページ数を表記する。また、読みやすさを考え、表記を適宜変えた箇所もある。なお引用の際には、日野龍夫校注 新潮日本古典集成『本居宣長集』新潮社 1983、および子安宣邦校注『排蘆小船・石上私淑言』(岩波書店、2003) 所収のものも適宜参照した。
- 3) たとえば前掲書巻一に「歌といふ物は、ほどよくととのひて文あるをいふなり。」(p.88) とある。なお「詞のほどよくととのひてあやある」とはどういうことかについては、宣長は「文ある」とは、詞のよくととのひそろひて、乱れぬことなり。大方五言七言にととのひたるが、古今雅俗にわたりてほどよきなり。」(同) と述べ、巻一第2項でそのさまを具体的に説明している。
- 4) 宣長は次のように述べている。「すべて世中にいきとしいける物はみな情あり。情あれば 物にふれて必おもふ事あり。このゆへにいきとしいけるものみな歌ある也。其中にも人はことに萬の物よりすぐれて 心もあきらかなれば おもふ事もしげく深し。そのうへ人は禽獣よりもことわざのしげき物にて事にふるる事おほければ いよいよおもふ事おほき也。されば人は歌なくてかなはぬことはり也。その思ふ事のしげく深きはなにゆへぞといへば 物のあはれを知る故也。事わざしげき物なれば 其事にふるるごとに 情はうごきてしづかならず。うごくとは あるときは喜しくあるときは悲しく 又ははらたたく 又はよろこばしく 或は楽しくおもしろく 或はおそろしくうれはしく 或はうつしく 或はにくましく或はこひしく或はいとはしく さまざまにおもふ事のある是即ものあはれをしる故に

動く也。」(『石上私淑言』巻一 p.99)

- 5) 「あはれときかるればこそ 心はなぐさむわざなれ」(同 p.112) 「聞人感とおもへば こなたの心もはるる事よなし」(同) とあるように、聞き手の反応は知的理解ではなく、「あはれ」という感動であり、詠み手の感動と響き合う共感である。
- 6) 「妻といはむとては まづ若草のといひ 夜といはむとては ぬば玉のとうち出るたぐひなどみな 詞を文にして調をほどよくととのへむためならずや。」(同 p.113)
- 7) 「敷島のやまとはあらぬからころもころもへずしてあふよしもがな みかのはらわきてながるるいづみ川いつみきとてかこひしかるらむ よそにのみ見てややみなむかつらきやたかまの山の峯の白雲 これら おもふ心をばただ二句にいひて のこり三句はみな詞の文なり。さればいらぬ物のやうにおもふ人有べけれど 無用の詞のあやによりて 二句のあはれが深くなる也。万葉集に此たぐひことにおほし。すべてただのことばと歌のかはりとはこれ也。」(同)
- 8) 日野龍夫の注によれば、ものごとの本質と作用のことであり、朱子学概念を踏まえているとされる。(日野龍夫校注 新潮日本古典集成『本居宣長集』新潮社 1983p.441)
- 9) 「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひいだせるなり。花に鳴く鶯、水にすむかはづのこゑをきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして、天地をうごかし、目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ、男女のなかをもやはらげたけきもののふの心もなぐさむるは歌なり。」(以上、『古今和歌集』仮名序 引用は窪田章一郎校注『古今和歌集』角川日本古典文庫 1973 p.7 による) 「夫和歌者、託其根於心地、発其花於詞林者也。人之在世、不能無為。思慮易遷、哀樂相變。感生於志詠形於言。是以、逸者其声楽、怨者其吟悲。可以述懷、可以發憤。動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和哥。」(以上、同真名序 引用は前掲書 p.259 による)
- 10) ここは宣長の統治論としても読めるところであるが、本文でも触れるように、統治者にかかわらず人間一般の他者理解の特質について言及されている箇所として読むことも有効であると考えられる。一般人の日常における対人関係のことについて述べる中でも言及はされているが、統治者、一般人と各々を厳密に区別する必要はないかもしれない。いずれも、自分とは遠い存在、自分と経験を共有しにくい存在をどのように理解するかという点では、共有する問題は同じだろうからである。なお、本論の主旨から外れるかもしれないが、宣長が一般に経験が深い知をもたらすと考えている点は、宣長のものごと、ことがらを知ることにについての理解を検討する際の重要な切り口になると考えられる。自明な知は、経験による。今ここで、もしくは自分自身の心身で見聞し、感覚するものの知は、確かな手触りをもつものであるといった実感が、もしかしたら宣長にはあるのかもしれない。そしてこうした知のありかたが、ものを理で分析していかないで見る、天は天、地は地と見るあり方と通底しているのではないだろうか。
- 11) たとえば宣長は、次のように述べ、和歌の本体をわきまえることを主張する。「上つ代に歌をもてもはら政のたすけにし給ひ またなべて身のいましめにしたる事すべて見えず。もとよりさる事のようによむ物にはあらず。その本はただ物のあはれなるすぢをながめ出りより外なき事 さきぎきいふがごとし。さてつぎにさまさまの功德あるよしをいふは それを用ひたらむときの事にて體用のわきまへあるぞといふはこの事なり。」(同 p.168)
- 12) 『石上私淑言』巻三第八一項 の解釈で日野龍夫は和歌による説得を感動によるものとまとめている。(日野龍夫校注 新潮日本古典集成『本居宣長集』新潮社 1983p.452) それに対し、漢詩による説得を日野氏は「理論による説得」(同 p.451) であるとして、対比させて説明している。説得というと強いて分かってもらうというニュアンスがあり、感動という概念と説得という概念は直接結びつかないような印象も与える。しかしここで重要なのはむしろ、聞き手が納得して自分から自身の行為の変化を決意するといった、聞き手の主体的態度である。聞き手の主体的態度を強調するとすれば、確かに説得という言葉は不適切かもしれないが、この例では人殺しをやめさせたいという意図を持つ人 - 詠み手がどのような表現をするのかに力点が置かれていることから、言うなれば感動を与える方の視点から描かれていることから、説得という言葉が使用されたとしても、納得いく。気をつけるべきは、説得という言葉

でまとめたときに、聞き手側の主体的態度を見逃さずに捉えておくということであろう。ということで、論者も「感動による説得」など、説得という言葉を使用するここでの日野氏の解釈を採る。

- 13) なお箕子については、(1) 表面的にどんな厳しく雄々しい人であっても、その情の本質は女々しくはかないものであるということ、(2) 箕子の人目を気にして取り繕おうとする情はいつわりであり、かなしいという情が真の情であるということを示すために、取り上げられていると言える。宣長は前の項第六六項で次のように述べている。「史記といふふみに 箕子朝周過殷虚感宮室毀壞生禾黍箕子傷之欲哭則不可欲泣為其近婦人乃作麥秀之詩以歌詠之云々 といへるを見よ。箕子ばかりのひとだに物のあはれにたへぬおりはかゝりけるを 不可なり近婦人とおもひなをせるはまことにかしこけれど そはもてつけやういしたるうはべの事にて ただ物はかなくめゝしう欲哭泣しぞまことの情には有りける。」(同 p.152)
- 14) 「問云 世中にかなしき子をさきだてて 思ひ歎く親の有さまを見るに 父は猶のどやかにおもひしづめて さまよく見え 母はひたふるにふししづみて涙にくれまどひ かたくなしき事共をいひつづけて泣きさまよふを思へば 猶はかなくめめしきは 女わらべのしわざならずや。」(同) の問いに対して、「答云 さる事ぞかし。父のさすがにさまよう思ひしづめたるは げに雄々しくいみじきことにはあめれど そは人めをもつゝみ世にはづるゆへに かなしき情をおさへて あながちにもてつろひたるうはべ也。又母の人めもおもはでひたふるになきこがるゝさまは まことに女々しく人わろく見ゆれど これぞかざらぬ真の情にては 有ける。さればさまよく堪忍ぶとしのびあへぬとの うはべのけぢめこそはあれ 心のおくは父も母も悲しみの深さ浅さのかはるべうもあらねば まことにはいづれをかしこし共おろか也とも定むべき事にあらぬ中にも (後略)」(同 p.153) とある。
- 15) 宣長は、出発点としての漢詩は和歌と同質と考えているといつてよいだろう。経書にそくして漢意にすっぽりと覆われた「今の様」なる「是は不可それは近婦人」というようにものごとを裁断したり女々しいことをよくないと評価する趣に満ちた漢詩を、宣長は評価しないのである。そうした本意を忘れた漢詩に比して、詩歌の本質を今なお保持しているのは「此方の歌」すなわち和歌だとして、宣長は、漢詩に対するわが国の和歌の優越性を示そうとする。この路線は、背景にある人情のよしあしによって補強されていき、わが国そのものの優越性をめぐる議論にもつながっていく。
- 16) 和歌と漢詩の優劣の問題は、中国と日本の優劣の問題にもつながっていくが、本稿のメインの問題とずれるし、神代と現代の人性の変化の問題や後の神道論の方向性にも関わっていく問題でもあるため、細部まで深入りしない。ただ、見逃してはならない問題として最低限のことをここで述べ、検討の必要性を指摘するに留める。たとえば宣長は、次のように言う。「まづもろこしの詩も かの詩経のころはなを上つ代のすなをなりし心ばへの残りて あはれになつかしきふしおほかるを かしこの人ごゝろはすべてさかしげなる事をたふとひて いさゝかなるわざにも人のよしあしをこちたく論らひ なに事もわれがしこに物いふ國の ならはしなるが 周の代の中ごろよりこなたはいよいよ年月にそへて きのみなりもてきぬれば 詩も其心より作りいづるほどに 人情のあはれなるすぢはうせて いひといふ事ことごとしくしたゝかなることのみ也。さればかの詩経の詩と後の世のとをくらべみるにその心ばへさらに同じ物にはあらず。」(同巻二 p.149. 下線は田畑) 宣長はまずここで、中国において才知に富み才気走ることを好む「國のならはし」によって、中国でもともとあった素直であはれ深い情が変化してしまったことを指摘する。「國のならはし」とは中国の風俗・習慣のことであるが、ここでは、ものものしく才知に富むことを好むという傾向性、もしくはそうした価値観の意味も含むと取っておいてよからう。そして、この「ならはし」がわが国と中国の差異を形成することとなる。「おほかた人は いかにかかしきも 心のおくをたづぬれば 女わらはべなどにもことに異ならず。すべて物はかなくめゝしき所おほきものにて もろこしとても同じ事なめるを かの國は神の御國にあらぬけにや、いと上つ代よりして よからぬ人のみおほくて あぢきなきふるまひたえず。ともすれば民をそこなひ國をみだりて 世中をだしからぬおりがちなれば それをしづめ治めむとは よろづに心をくだき思ひをめぐらしつゝ とにかくによからん事をたどりもとむるほどに をのづから賢く智り深き人も出来 さるからいとど萬の事に さるまじき事にもいたく心もちひて 目に見えぬふかきことほりをもあながちに考

へくはへなどしつゝ いさゝかのわざにも善さ悪さをわきまへあらそふをいみじき事にして(後略)」(同 p.151 下線は田畑) 前に確認したように、人情の本質は中国でも日本でも同じである。しかし中国では昔から性質の善くない人が多いため世の中が平穩でなく、平穩に治めるためにもごとの道理を深く追究していったり、善悪を裁断する仕方が尊ばれたりするようになったという。性質のよくない人が多いことにより生じた国のありようが、中国の人の価値基準を形成していく。とすれば、つきつめればここで表面化するのが、根底の「よくない人が多いか否か」という元々の人間の性質における差異である。宣長は、日本についてはこう述べる。「吾御国は天照大御神の御國として 侘国々にすぐれ めでたくたへなる御國なれば 人の心もなすわざもいふ言の葉も 只直くみやびやかなるままにて 天の下は事なく穩に治り来ぬれば 人の國のやうにこちたくむつかしげなる事は つゆまじらずなむ有ける。」(同 p.154) 和歌と(厳密に言う) 詩経以後の漢詩との差異の問題は、つきつめていくとももとの国の優劣へ繋がっていく。先取りするならば、感動をあまりもよおさない「ことごとしさ」「さかしげなる」ありようは、日本とは異なる中国の変化によってもたらされたものであるとされる。日本の古代もまたそういう中国の「さかしらだつ」ありように全く影響を受けないわけではないし、むしろ宣長からすれば当代では多大な影響を受けていて、本来のみやびさなどを忘れていくということにもなる。それでもなお宣長は、人の心がいいかどうか、もしくは賢しらだつことが重んじられる価値基準が育つかどうかといったことを、そこが神の国であるかどうかにかんして考える。和歌と漢詩の差異を形成する、すなわち漢詩の「かしこげ」に「道々しく」表現するあり方の土台は、そこが神の国ではないということによるという説明が可能になるのである。以上のように、本来的なよさが保たれるのは神の国においてであるという、宣長における神道論の基礎が歌論である『石上私淑言』にも垣間見えるわけであるが、ここで宣長がそうしたことを述べる意図と意味についてはなお、検討の余地がある。

なお、中国が古代より治まらない国であるのに対し日本は争い事がなく平穩であったという優越性に基づく神国意識は、神道論『直毘靈』において、中核的な論となっている。

17) 同巻二 pp.150-151 の第六五項参照。

18) 宣長によれば、漢詩の劣化は、中国における特徴的な「さかしげなること」「道々しき」ことを尊ぶ価値観によるとされる。よりつきつめれば、その価値観はわが国と中国のそもそもの質の相違にも繋がっていく。注 16) も参照。

19) 宣長はここでの工夫を「かしこし」とは言っているが、手放しの肯定ではない。むしろそうした工夫は、宣長においては否定されるべき取り繕い、作為であった。日野龍夫はこの箇所について、「この態度が単にいきぎよいだけでなく、狡智を内にひそめていると説明するのは(中略)宣長が儒教の本質は偽善と狡智にあると考えていることによる」(日野龍夫校注 新潮日本古典集成『本居宣長集』新潮社 1983p.452) と述べ、この態度には宣長の嫌う儒教の本質「偽善と狡智」が表れているとする。儒教の本質については、同 p.408 注二の日野龍夫の記述も参照。なお、ここでの態度の偽善とは、本当なら死ぬことはどんな人にとっても悲しく辛いのもにかかわらず、それをなんでもないと平気な振りをし取り繕い、落ち着いている様を言うのであろう。

20) もちろん宣長は、何度も言うように、ただ素直に何も飾らずに心情を表現することを主張しているわけではない。和歌はあくまでただ詞ではなく、文あるものであった。ここでは、うわべをつくろう漢詩と対照させて、本来的な人情をいつわらずに表現するものという特徴を強調しているのであろう。なお、いつわりというときには、宣長は単なる飾りというよりは、他者の目を気にして自分をよくみせようという自己中心的な気持ちに基づく工夫を念頭に置いているのではないかと考えられる。

21) 20) でも少し指摘したがもちろん、宣長において事はそう単純ではない。ありのままの情の表出がそのまま肯定されているわけではないからである。感動を人間の本質とする場合、宣長が一方で時代が降るにつれて劣化してきている人性の指摘と、それ故に、做うことによってより理想的に感動ができ、その感動を適切な形へと表現できるようになる訓練の必要性を考えていることは、無視できない問題である。宣長は、基本的に人間、特にわが国の人間性への信頼を抱いてはいるが、かつては存在し、宣長の世においては廃れてしまっている本来的な人間性の回復のための努力・工夫という形の作為を要請する。

その作為によって最終的には宣長の目指した人間性は回復し、習い、性となるとばかりに、自分の物となる。こうした自然に向かうための作為が、宣長の歌論においては重要なテーマになると思われる。それはもちろん、人目を気にして繕ったり隠したりする「いつわり」という意味での作為ではあり得ない。神代から比べて変化してきた人性であるが、元の人間性とそれを最大限に表現できる形式を真に自分のものにできるための作為というのが重要なのである。ただし歌論も、「実情」を巡る問題など深い問題を孕むので、『排蘆小船』をはじめとした歌論を読み直し、より総合的に見る必要があろう。ここではその必要性のみ指摘しておく。

- 22) 『石上私淑言』巻三においては神の道への言及があり、当該書においても神道論との関連で論じることが可能だと思われるが、正確かつ精密に見る必要があるため、他の神道論書を踏まえ全体的に考察する方法を後日取りたい。ただ、わが国と中国との間で、決定的に違ふとされる人性の問題がどう絡んでくるかが重要なポイントであり、神道論を考える際も人性の優劣の問題を一つの切り口とするのが有効なてだてではないかということ、ここで示しておく。